

日本生理心理学会・日本感情心理学会 合同若手シンポジウム 次世代生理心×感情心クロスセッション

企画：日本生理心理学会若手会・日本感情心理学会 ECR 会

司会：伊崎 翼（畿央大学，生理心理学会），山本 晶友（昭和女子大学，感情心理学会）

本シンポジウムでは、口頭発表形式により、若手研究者がこれまでの研究成果や現在取り組んでいるテーマ、そして今後の展望について発表します。分野横断的な議論を通じて、新たな研究視点や共同研究の可能性を探ることを目的としています。

講演1 「不快さへのまなざしを考える（仮）」

石川 遥至 （兵庫教育大学，感情心理学会）

不快な出来事は一般にネガティブな感情の生起を招くが、その程度や持続期間は個人の認知や行動（反応スタイル）にも左右される。反応スタイルは、出来事や感情に注意を向ける「反すう」とそこから逸らす「気そらし（気晴らし）」に大別され、主に後者が適応的な感情制御方略とみなされてきた。しかしながら臨床的介入の中には、ある特定の形式で不快な対象に注意を向けることを促すものが含まれる。本発表では、不快な感情や記憶に対する注意の焦点化や配分、またその際の心的態度が心理的適応に及ぼす影響について検討した、気そらしやマインドフルネスに関する研究を紹介する。

講演2 「音楽が誘発する感情とグルーブ感における予測処理の役割」

石田 海 （大阪大学，生理心理学会）

音楽を聞くと快いと感じたり、身体を拍に同期させてノリたくなるグルーブ感が生じる。本発表では、音楽聴取によって誘発される感情やグルーブ感を、音の予測処理から説明する。まず、モデルベースで計算された和音の予測処理にかかわる情報量が、聴取者の感情価や覚醒度に影響することを示した研究を紹介する。次に、リズムの拍の予測にかかわる情報量が、グルーブ感やそれに伴う快感情に影響することを示した研究を紹介する。これらの知見に基づき、音楽が感情を生じさせるメカニズムとして予測処理の役割を議論する。

講演3 「社会環境との相互作用としての感情制御（仮）」

浦野 由平 （山形大学, 感情心理学会）

感情制御研究ではこれまで個人内プロセスが主に注目されてきたが、本発表では、感情制御を社会環境との相互作用の中で成立するプロセスとして捉える立場をとる。対人的相互作用やデジタルテクノロジーといった社会環境要因が、感情制御のあり方にどのように関与しているのかに着目し、これまでに取り組んできた複数の研究を横断的に整理する。あわせて、現在進行中および構想中の研究の方向性や今後の検討課題についても言及する。

講演4 「行動指標と生物学的指標から捉える『あがり』の統合的理解」

小笠原 香苗 （理化学研究所, 感情心理学会）

心理的なプレッシャー下でパフォーマンスが低下する現象は「あがり（choking under pressure）」とよばれる。あがりは個人が本来もつ能力の発揮を妨げるため、そのメカニズムの解明は Well-being の実現に向けて大きな意味をもつ。しかし、あがりを説明する統一的な枠組みは確立していない。本講演では、発表者がこれまでおこなってきた研究をもとに、あがりのメカニズムを議論する。主観・行動指標の計測にとどまらず、心拍、瞳孔径やfMRIにより得られる脳活動指標といった生物学的基盤も併せて統合的に検討することが、プレッシャーが行動変容を引き起こす過程の解明に大きな役割を果たしうることを示す。

講演5 「他者の感情表出に対する顔面筋電図反応」

中村 杏奈 （東京女子大学・日本学術振興会, 感情心理学会）

他者の表情を見たときに、その表情を即時に、かつ、無意識に模倣する現象は、表情模倣と呼ばれる。表情模倣は、他者の運動の純粋な模倣であると理解する立場がある。一方で、他者の感情を理解する過程において、観察者が自らの身体を用いてシミュレーションする結果として表情模倣が生じている可能性も指摘されている。本発表では、顔面筋電図(EMG)を用いて表情模倣の測定を行った研究を紹介し、他者の感情を理解することにおける表情の動きの役割を検討する。